Ｚｏｏｍにて語りはじめて六か月昭和を近代と呼ぶ人に会う　藤島秀憲

Ｚｏｏｍで会う人は、日常生活で会う人とちがうだろうと予想していたらやっぱりちがった、という文脈を読んでいいだろう。やっぱり不思議な人に出会うよね、という一首。近代と現代の区切りをどこにおくか。大正時代までが近代、日本文学史では芥川龍之介の死までが近代、これがむかしの常識だったが、最近は、戦前までが近代、戦後からが現代とする区分が一般的になってきた。私はまだ、昭和まで近代、平成以後が現代と呼ぶ人に会ったことはない。

蛇踏んでしまった人の後悔をふみながら行く蛇出そうな道　大澤澄代

蛇が大嫌いな作者なのだ。一首中に「蛇」を二回、「踏む」を二回使って、恐る恐る歩いてゆく心の震えをつたえている。

真白きシャツに秋は来ている襟立てて大学前のバス停を過ぐ　児島直美

夏用のシャツを秋用のシャツに替えただけで、新しい気持ち、更新された気分なのだ。現在の気分をいじりまわさないで、そのまますっとさしだした気合いが新鮮。

空ゆ来る魂と空へと還る魂　銀河の駅の賑わいつづく　大谷ゆかり

「銀河の駅」はたくさんの魂がそこを中継地としているらしく、いつでも混雑しているらしい。なぜ魂が空から空へ行ったり来たりしているのかは分からないが、そんな駅の存在を認めたがっている自分に気づく。

短歌の現在

No.488　今月の15首を読む

佐佐木幸綱

膝つきて横倒れの首に触れし後騎手振り向かず救護車に乗る　森祐希子

競馬である。レース途中で転倒した馬が「予後不良」と判定された場面。安楽死させられるのである。今月の一連七首は、すべてその件がうたわれている。この作、形容詞・副詞は全くなく、名詞と動詞だけで構成し、ドキュメント・タッチの味わいを出している。競馬については競馬好きの晋樹隆彦「選歌ルーム」に詳しい。

針金で巻いて吊るしたチランジア風にゆらめく程度の自由　廣間菜月

「チランジア」は、エアープランツとも呼ばれ、土がなくても育つということでいま人気の観葉植物。上句が序詞のように働いて、「……風にゆらめく程度の自由」を起こすかたちになっている。去年の失恋が尾を引いている現在の私をクローズアップした今月の一連。「……クリームブリュレの膜を壊して」など、新しい素材を積極的に比喩に採用して、特色を出している。

初風に揺れるカーテン　コロナ禍の土産話はすぐに途切れる　帖佐光浩

「初風」という俳句で使う語（逆に短歌ではあまり使わない。ここでは秋の初めの風の意味）を採用して、読者を「えっ」と思わせる。軽い内容にふさわしいテクニックといえる。

夕焼けと同じ色して口腔より裏返りさうにあくびする猫　岸並千珠子